

公益財団法人 檉の芽会 御中

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		①作成日	令和 8 年 5 月 29 日
②法人・団体名	特定非営利活動法人 Learning for All		
③団体所在地	東京都新宿区区新宿 5 丁目 1-1 ロイヤルマンションビル 404		
④責任者氏名	李 炯植	(役職名等)	代表
⑤担当者氏名	穀田 莉央	(役職名等)	子ども支援事業部 学習支援事業マネージャー

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R07-026	⑦助成金額	100 万円	⑧申請カテゴリー	FS
⑨奨学活動名	経済的困窮や不登校など困難な環境にいる子どもたちへの個別学習支援事業				
⑩主な実施場所名・及び その住所	立石拠点：近隣の公民館（お花茶屋市区センター等） 金町拠点：近隣の公民館（新宿防災コミュニティセンター等）				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式 3 - 2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

東京都葛飾区に住む小学 4 年生~高校 4 年生で、経済的困窮や不登校など困難な環境にあり、学習ニーズがある子供と世帯を対象に、①学習支援、②安心空間の提供、③保護者支援、④関係機関連携を実施した。週 2 回（水曜 18:00-20:00、土曜 13:00-17:00）開室し、子ども 1-2 名に対しボランティアの大学生がつき、個別で指導にあたった。登録がある子ども全員に対し、習熟度や学習環境、本人の希望に合わせた中長期的な目標を定め、当該目標を達成するために必要な個別カリキュラムとコミュニケーションプランを作成し、毎回の指導は当該カリキュラム、コミュニケーションプランに準じて行った。

- ・登録者（サービス受益者）：21 名（小学生 4 名、中学生 14 名、高校生 3 名）
- ・開室回数：計 138 回（立石（週 2）：計 93 回、金町（週 1）：45 回）
- ・支援回数：のべ 558 名
- ・進学実績：中学生 2 名のうち、2 名が高校入試を受験し、2 名が合格

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式 3 - 2 等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (A × B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	280.8	2	561.6	A{13 名(子ども数)}×4 週×9 か月×0.6(出席率 6 割)}×B{2h(指導時間)}
高校生等	64.8	2	129.6	A{3 名(子ども数)}×4 週×9 か月×0.6(出席率 6 割)}×B{2h(指導時間)}
大学生等	0	0	0	募集していないため
学習支援 員等			2,508	①土曜（プログラム）ボラ 10 人×14h（指導 4h+準備 10h）×44 週×出席率 6 割=1848 ②水曜(プログラム外)ボラ 5 人×5h（指導 2h+準備 3h）×44 週×出席率 6 割=660 ①②の合計を活動量として記載
その他 (職員)			1,728	①拠点長：{1 週あたり週 40h×2/5(週 2)}×4 週×9 か月} ×2 名 ②マネージャー：1 週あたり週 40h×1/5(週 1)}×4 週×9 か月 ③ソーシャルワーカー：1 週あたり週 40h×1/5(週 1)}×4 週×9 か月 ①②③の合計を活動量として記載

⑬その他の定量的な数値（任意）

- ・保護者へのサポート（*保護者面談、保護者の相談対応（電話、関係機関同行、SNS での情報提供など）：55 回
- ・SWer のケース対応（*上記以外の子ども本人に関するケース対応、関係機関連携、情報対応など）：56 回
- ・学生のプログラム満足度

学生ボランティアに対する事後アンケートでは、高い満足度を示す結果が見られた

- ・本プログラムに参加した目的は達成されましたか？：7.5/10
- ・子どもとの指導・関わりにおいて楽しさや学びがありましたか？：8.9/10
- ・プログラムを通し、自分自身の気づきや学び、変化はありましたか？：8.7/10

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：

経済的困窮や不登校など困難な環境にいる子どもたちへの個別学習支援事業

法人・団体名：特定非営利活動法人 Learning for All

作成者 氏名：穀田莉央

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

東京都葛飾区に住む小学 4 年生～高校 4 年生で、経済的困窮や不登校など困難な環境にあり、学習ニーズがある子供と世帯を対象に、①学習支援、②安心空間の提供、③保護者支援、④関係機関連携を実施した。週 2 回（水曜 18:00-20:00、土曜 13:00-17:00）開室し、子ども 1-2 名に対しボランティアの大学生がつき、個別で指導にあたった。登録がある子ども全員に対し、習熟度や学習環境、本人の希望に合わせた中長期的な目標を定め、当該目標を達成するために必要な個別カリキュラムとコミュニケーションプランを作成し、毎回の指導は当該カリキュラム、コミュニケーションプランに準じて行った。（カリキュラム、コミュニケーションプランは現状をふまえ 3 か月に 1 回見直しを実施した）

2. 実施した奨学活動の詳細

【学習支援の実施内容】

- ・登録者（サービス受益者）：21 名（小学生 4 名、中学生 14 名、高校生 3 名）
- ・開室回数：計 138 回（立石（週 2）：計 93 回、金町（週 1）：45 回）
- ・支援回数：のべ 558 名
- ・進学実績：中学受験生 2 名のうち、2 名が高校入試を受験し、進学が決定した。

〈学習支援中の子どもたちの様子〉

子どもたちとの長年の関係性構築と本人に合わせた伴走の必要性を感じた 1 年だった。象徴的な事例として、小 4 から学習支援拠点（以下：拠点）を利用している高 2 の子どもの事例を挙げる。小 4 の利用開始時より拠点が好きで毎年 90%ほど来室していたが、中学卒業で拠点を卒業し、その後、高 2 の際に希望進路である公務員試験に挑戦したいとのことで再度登録になった。本人と現在の点数と目標点の乖離、そしてその差を埋めるために苦手科目を達成する必要性を一緒に確認し、以前の情報に基づいて彼が理解しやすい「講義→実践問題」の形で指導を行った。その中で、本人から「先生に言われたらやるしかないですね」という言葉が聞かれたが、この背景には小 4 から 7 年間かけて築いてきた拠点への信頼感と拠点の中で自分が努力して達成したことに対する自信の現れであったと思われる。本件は、今までの彼と拠点の信頼関係や拠点が彼の学習しやすい方法をしっかり把握していることがベースにより良い支援ができた事例であると言える。本子どもは現在高 2 のため公務員試験まであと 1 年ある。引き続き支えていきたい。

【保護者支援、関係機関連携】

- ・保護者へのサポート（*保護者面談、保護者の相談対応（電話、関係機関同行、SNS での情報提供など）：55 回
- ・ケース対応（*上記以外の子ども本人に関するケース対応、関係機関連携、情報対応など）：56 回

＜保護者支援、関係機関連携での学びや課題＞

子どもたちが安心して学習に取り組めるため、ケース対応や関係機関との連携の必要性を重点的に行った 1 年だった。昨年に引き続き、保護者へのサポート、ケース対応が合わせて 100 回近く発生し、多くのニー

ズがあることが分かった。その中でも、特徴的な例として、学習やゲームとの付き合い方において母子葛藤があった家庭の子どものケースを挙げる。母子葛藤が高まる前に本人、保護者と関係性を築いておくことを大事に関わってきたが、母子葛藤が高まった際に、本人、母とそれぞれ話をする機会を設けた。本人は今まで相談が苦手で自分のことを話してくれることが少なかったが、母との関係や将来についてどのように考えているのかを話してくれた。次に保護者から話を聞く中で、今まで見えていなかった家庭の状況が見えてきた。そして、母自身がかつては不信感を持っていた行政機関への相談ができ、結果として、拠点もソーシャルワーカーも行政機関と連携しながら、本世帯を以前より見守れるようになった。本件では子どもの思い、家庭の様子、保護者の困りが見えたことで、子どもが学習に取り組むための環境整備が進んだ事例である。改めて、本エピソード及び他のケースより、学習支援拠点だけで勉強を教えるのではなく、関係機関とつながり、保護者も含めた世帯全体を支援する必要性を感じた。

【大学生に対するボランティアプログラム】

〈学生のプログラム参加人数〉

・延べ人数：279 名

〈学生のプログラム満足度〉

学生ボランティアに対する事後アンケートでは、高い満足度を示す結果が見られた

〈学生の声〉

参加した学生からは以下のような感想が聞かれた。大学生に対するボランティアプログラムに参加する前と参加したあとで、「子どもの貧困」への理解が深まった様子や新たな価値観や発想に出会えたことが分かった。

- ・自分の将来に繋がるような体験をすることができた
- ・子どもが理解した瞬間に立ち会うことで、教える楽しさを実感できました。また、子ども一人ひとりに合わせて工夫する力も身につきました。
- ・生徒と教師という関係を超えて友達同士というような関係で対等に接することができたのも信頼関係が構築できた証だと前向きに捉えている

【フードパントリー】

月 1 回、フードパントリーを開催し、令和 7 年 5 月 29 日時点、のべ 321 名が参加した。

子ども同士が登録拠点を越えて関わる姿、子どもと地域の人に関わる姿などが見られ、多くの交流が生まれた。また、学習支援拠点に来る子どもの保護者や、子どもの兄弟姉妹に会うことができ、近況や家庭の様子などをキャッチすることや、世帯の相談に乗ることにおいても、フードパントリーでの交流が役立っている。同イベントは子どもにとっても保護者にとっても居場所になっている様子が見られる。違う拠点に通う子ども同士と一緒に遊び、次のフードパントリーでも会おうと約束する姿や「何かボランティアをしたい」というきっかけで参加した保護者が、様々な人と出会う中でフードパントリーを自分の居場所の 1 つに感じている様子などが見られた。

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

【①子どもたち 1 人 1 人に合わせた関わりの必要性】

子どもたち 1 人 1 人に合わせた関わりの必要性を改めて感じた 1 年だった。上述の子どもの事例から「長期間にわたる信頼関係と本人情報の把握に基づいた伴走の必要性」に気づいたが他にも子ども毎のニーズや困りに目を向ける機会が多くあった。

＜不登校傾向がある子どもにおける、学習方法そのものを知るニーズ＞

1 つ目は、不登校傾向がある子どもにおける、学習方法そのものを知るニーズである。本人に英単語の宿題を提案したところ、そもそも単語の覚え方が分からないと伝えくれた。本人に単語の覚え方を教えたところ 1 人で学習できるようになり、少しずつ学習を進める様子が見られた。

<学習に抵抗感がある子どもにおける、本人の強みを活かした学習アプローチの大切さ>

2つ目は、学習に抵抗感がある子どもにおける、本人の強みを活かした学習アプローチの大切さである。学習に苦手意識はあるものの興味関心のある分野において雑学を覚えたり出来事を関連づけて覚えたりできる強みがある子どもに対し、本人が好きなアニメのキャラクターの名前とその名前に関連する英単語の単語学習を進めた。その結果、英単語を「好きな分野での雑学」としてをとらえて、英単語をより覚えられるようになった様子や学習における抵抗感も減った様子が見られた。子どもたちの多様なニーズや強みに触れ、それらを活かしながら学習を進める必要性を改めて感じた1年だった。

<本人の意思決定のタイミングを待つことの大切さ>

3つ目は本人の意思決定のタイミングを待つことの大切さである。不登校傾向や本人の調子が整わず拠点に来室できていない子どもがいたが、保護者と連携を取りながら本人の様子を把握しつつ、いつでも戻ってきていいよと伝えていた子どもがいた。本人が中3の年にあたる本年12月に、本人から連絡があり、「勉強をがんばりたい」と来室をはじめ、合格に向けて勉強に取り組む姿が見られた。同様の事例をもう1つ挙げる。不登校傾向がある子どもが「同年代とのコミュニケーションをがんばりたい」というニーズがありながらも拠点に来るまでの不安があり来室できないことがあった。そのような状況の中で、本人から「自分にとって本当に拠点が考えたい」という意見を聞くことができ、休会機関を設け、拠点に通い続けるかじっくり考える時間を取った。その結果、やはり拠点に通うことが自分にとって必要だと気づき、以前よりも頻度の高いペースで出席することができるようになる、オンラインを併用しながら参加をする工夫が見られる、など変化が見られた。これらの事例から、子どもには、本人の意思決定のタイミングがあり、それを信じて見守る必要性を考えさせられた。

【②子どもが学習に集中できる環境づくりのためのソーシャルワーカーと拠点の連携の大切さ】

上述の通り「子どもが学習に集中できる環境づくり」のために保護者の支援や関係機関との連携の必要性を感じたが、「子どもが学習に集中できる環境づくり」のために、できることはまだたくさんあると気づかされた1年だった。特にソーシャルワーカーと連携してできることが増えた事例があり、2つ例を挙げる。営団体内にいるソーシャルワーカーが子どもたちと個別で過ごす機会を作り、本人の話を聞く中で、援助希求力を高め、困りを一緒に解決する関わりを1年間行ってきた。1人目は、学習支援以外でも本人の話を聞いてほしいニーズがあり、本人の話を聞く機会を週に1回程度設けていた。最初は本人の趣味に関わるトピックが多かったが、半年ほどその関わりを続ける中で自分の将来の希望やその中で勉強ができないと難しいかもしれないと思っていること等を話してくれた。本関わりの中で、本人の思いを聞くことができた上、特性の検査や試験等での配慮に関する情報を知る機会にもなった。もう1人は、友人関係や異性関係での困り感を抱えており、本人の話を否定せず受け止めてくれてほしいニーズがあった。2週間に1度のペースで本人との関わりを続ける中で、友人関係や異性関係での本人の困りを開示してくれるようになり、それらの困りに関する本人へのアプローチと保護者・関係機関と連携した見守りを行えるようになった。これらの事例は本人が自分の話をじっくり聞いてもらえる感覚を得て援助希求力を高めることの大切さと、困りが出てきた先に専門性を持って本人と困りを一緒に解決していけるソーシャルワーカーとの連携の必要性を示唆している。今後も「子どもが学習に集中できる環境づくり」のために、ソーシャルワーカー、保護者、関係機関など連携し、それぞれの役割を意識して見守っていかうと考えている。

【③卒業生世帯との継続的な関わり方の必要性】

卒業生と定期的に連絡を取り、見守りを行う必要性に気づいた1年だった。特徴的な事例を2つ挙げる。1つ目は、高校受験後をサポートした後に卒業した子どもと連絡を取り続ける中で、本人の困りに気づき再度拠点への登録につながったケースである。彼女と卒業後も連絡を取り、定期的に個別で話を聞く機会を設ける中で、「高校生になると学習内容が難しく授業についていけない」「塾に通うことも考えたが私立校に進学したこともあり塾に通うことは難しい」「本当は公立校に進学したかったが私立になってしまったからこ

そ、大学は公立に行きたいけど、勉強が分からない中でどうしたらいいのか分からない」など本人の思いや困りを話してくれ、結果として拠点に登録することができた。2つ目の事例は、外国ルーツのある高校生が進学した大学での奨学金の困りを伝えてくれたケースである。昨年、日本の奨学金制度が複雑で分からない、学校には相談しづらい、受験勉強と平行して本人が実施しなければならないことが多いなどの困りを抱えていた子どもが、大学に進学した際に記載すべき奨学金関連の書類の書き方が分からないと連絡をくれ、関係機関と連携しながら対応を行った。本ケース及び他に連絡をくれた卒業生に共通しているのが、一度進学先や就職先が決まり拠点を卒業したとしてもその先で困難な状況に陥り、助けを必要としているのに相談先がないことである。引き続き卒業生と連絡を取り続けると同時に、年を重ねる毎に増えていく卒業生の困りをサポートできる体制を整えていく。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

※上記2の「実施した奨学活動の詳細」に記載。

5. 学識者からのご意見、コメント、等（申請カテゴリーにて「S」が付されている団体）

※会計士・税理士による監査報告書の添付を予定しているため、「C・D 会計報告書の提出」の作成後、6月頃に提出予定（事務局のご担当者様に確認済み）